

第2章 調査に至る経緯と概要

第1節 調査に至る経緯と経過

a. 調査に至る経緯

本調査は、岡山大学医学部動物実験施設改修に伴う発掘調査である。岡山大学鹿田キャンパスでは、2014年に動物実験施設の増築が行われることとなり、自然生命科学研究支援センター動物資源部門鹿田施設の東側に接した本体地点（以下A地点）において、発掘調査の計画がなされた。

本調査地点西側に建つ動物実験施設（西半部）では、本センター設置以前の1981年度の新営に際して岡山市・県教育委員会によって立会調査が実施された⁽¹⁾。工事掘削後の調査区壁面調査であったが、壁面には中世の溝や土坑と思われる多くの遺構が確認された。したがって、隣接する本調査地点にも遺構の広がりが明らかであったため、発掘調査を実施した。1981年度に確認された遺構の詳細は不明確であったことから、当時の遺構確認にも期待がもたれた。また、本調査地点北側の第7次調査地点では、古墳時代初頭の遺構・遺物が報告されており、本地点にも各時期の遺構が広がっていることが予想された。

発掘調査開始後、外溝工事計画が進行する中で、同施設南側において排水槽設置のために発掘調査対象となる地点が追加された（以下B地点）。工事工程の都合からA地点と調査の同時完了を求められたため、調査員の増員などを行うことで発掘調査体制の強化をはかり、B地点の調査を同時進行にして対応した。

調査面積はA地点では273㎡で調査員2名が担当し、B地点の開始とともに3～4名で行った。B地点では22.5㎡で、調査員1名が担当した。

b. 調査と報告書の体制

調査主体	岡山大学	学 長	森田 潔
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	門岡 裕一
〃	〃	副センター長	新納 泉
調査研究員（調査主任・報告書作成）	〃	助 教	山口 雄治
調査研究員（調査担当・報告書作成）	〃	助 教	南 健太郎
調査研究員（調査担当）	〃	助 教	野崎 貴博
〃	〃	教 授	山本 悦世

運営委員会委員

【発掘調査年度（2014年度）】

財務・施設担当理事（センター長）	門岡 裕一	大学院自然科学研究科教授	
大学院社会文化科学研究科教授			（調査研究専門委員） 鈴木 茂之
（副センター長）	新納 泉	埋蔵文化財調査研究センター教授	
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義		（調査研究室長） 山本 悦世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二	施設企画部長	須崎 茂弘
大学院環境生命科学研究科教授・ 附属図書館長	沖 陽子		

【報告書作成年度（2018年度）】

財務・施設担当理事（センター長）	菅 誠治	大学院医歯薬学総合研究科教授	大橋 俊孝
埋蔵文化財調査研究センター教授		大学院社会文化科学研究科教授	
（副センター長）	山本 悦世	（調査研究室長）	清家 章
大学院社会文化科学研究科教授・		大学院自然科学研究科教授	
附属図書館長	今津 勝紀	（調査研究専門委員）	鈴木 茂之
大学院社会文化科学研究科教授	松本 直子	施設企画部長	松山 忠生
大学院環境生命科学研究所教授	加藤 鎌司		

c. 調査の経過

【A地点】

表土掘削及び基礎の撤去は8月18日に開始し、27日に完了した。調査員1名が対応した。調査区東半では近代の耕作土を確認できたが、西半では弥生時代後期の基盤層まで、また南側の一部ではそれよりも深く建物基礎に伴う攪乱が及んでいた。

発掘調査は8月28日から開始し、調査員2名が担当した。近代の耕作土を下げると、近世の土坑が1基検出された。その後、層位ごとに調査を進め、中世では大型の溝や井戸・土坑・ピットなどを検出した。溝からは多数の遺物に加えて獣骨も出土した。有機質遺物は、資料の同定に備え、土ごと切り取って持ち帰った。10月24日に中世層までの調査を終了させた。この時点で、B地点における調査が開始となり、調査員1名の体制となった。

古代の遺構は、基盤層まで現代の削平が及んでいたA地点西半において土坑のみ検出した。続いて東半を古墳

時代前期前葉の層まで下げ、当該期の井戸・土坑・溝・小区画溝群などを検出した。この段階で、進行状況と工期を勘案して調査員2名を増員して調査を行った。小区画溝群は、分析のために一部断面を切り取って持ち帰った。その後、弥生時代後期の基盤層まで掘り下げを行い、溝を検出した。2014年11月17日にすべての作業を完了した。

なお、調査と同時並行で隣接する動物実験施設の改修工事も行われており、その影響で調査の中断を余儀なくされたこともあったが、大学施設企画部、建設業者と調整しつつ十分に安全面に配慮して調査を行った。現地説明会は11月1日に行い約100名の参加を得た。

【B地点】

表土掘削は10月23・24日に行った。調査員1名が対応した。調査区北側では排水管によって包含層が破壊されていたため、その南側が調査対象域となった。

発掘調査は10月27日から開始した。調査にあたってはA地点にいた調査員2名のうち、1名が担当することになった。近代層を下げると、中世の溝を検



小区画溝群作業風景



現地説明会の様子

図3 調査風景他

出した。他に古墳時代前期前葉の溝、弥生時代後期の帯状高まりと溝を確認した。その後、基盤層まで掘り下げを行い、2014年11月10日にすべての作業を完了した。

註

(1) 吉留秀敏・山本悦世・栄 一郎 1985『岡山大学構内遺跡調査研究年報1』岡山大学埋蔵文化財調査室

第2節 調査の概要

本調査においては、弥生時代後期～古墳時代前期前葉、古代～近世までの遺構が確認された。以下にその概要を述べる。

弥生時代後期～古墳時代前期前葉 (図4)

弥生時代後期では、A地点で溝7条・焼土溜まり、B地点で溝1条・畦畔と考えられる帯状高まりが、古墳時代前期前葉ではA地点で井戸2基・土坑7基・溝5条・小区画溝群が、B地点では溝3条が検出された。すなわち、A地点では井戸をはじめとする生活関連遺構が、B地点では畦畔といった生産遺構が確認されている。

弥生時代後期以前の地形は、A地点北半が高く、南東部が低くなる。弥生時代後期には、A地点の北端には焼土溜まりがあり、東半には南北方向の溝が走る。これらの溝は等高線に直行している。B地点では帯状高まりと溝が確認される。帯状高まりは畦畔と考えられ、CJ～CKライン間以南に展開するものと考えられる。こうした遺構配置は、旧地形の高低差と関連しているといえよう。

古墳時代前期前葉になると、地形はおおよそ平坦になる。A地点の南半では井戸がつくられる。東半では溝が前代とほぼ同様の位置に同様の方向で展開する。これらには高い連続性がうかがえる。南東部では小区画溝群が確認された。B地点では溝があるのみである。

古代～近世 (図5)

古代では、A地点で土坑1基のみ確認された。中世前半では、井戸1基・土坑5基・溝10条が確認できた。

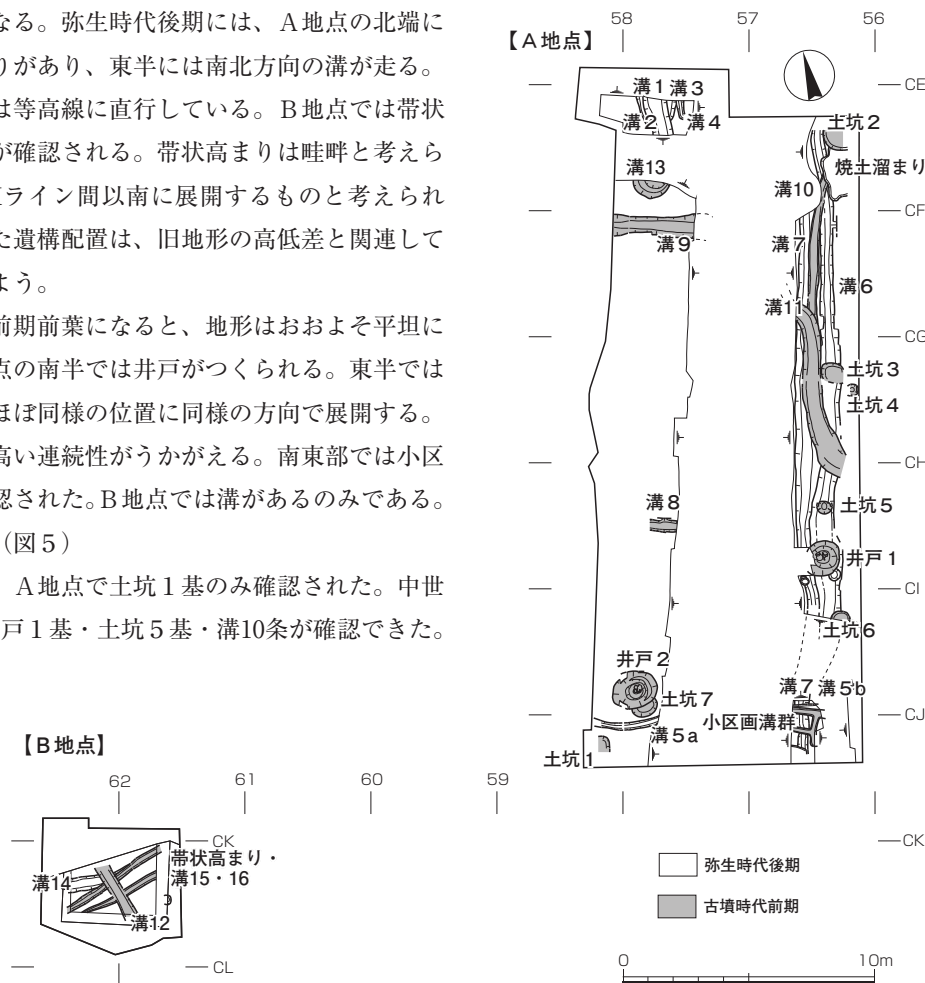


図4 遺構全体図 (弥生時代後期～古墳時代前期前葉) (縮尺1/300)

調査に至る経緯と概要

他に中世の遺構として土坑1基・ピット群がある。そのほとんどがA地点で確認された。中世前半には東西・南北方向の溝による区画が特徴的である。A地点の中央部を大型の溝が南北に走り、CE～CFライン間では東西方向の大型の溝がこれに接続する。この南北溝の西側には井戸があることから、これらの溝は屋敷地を区画する溝と考えられる。本調査地点は、その交点部の様相を明らかにした。これらの溝は13世紀前半～14世紀のものである。なお、本調査地点の北側約50mに位置する第7次調査地点の溝20～23に接続することから、屋敷地の南北幅が約57m、約1／2町であることが明らかとなった。

近世では土坑1基を確認した。

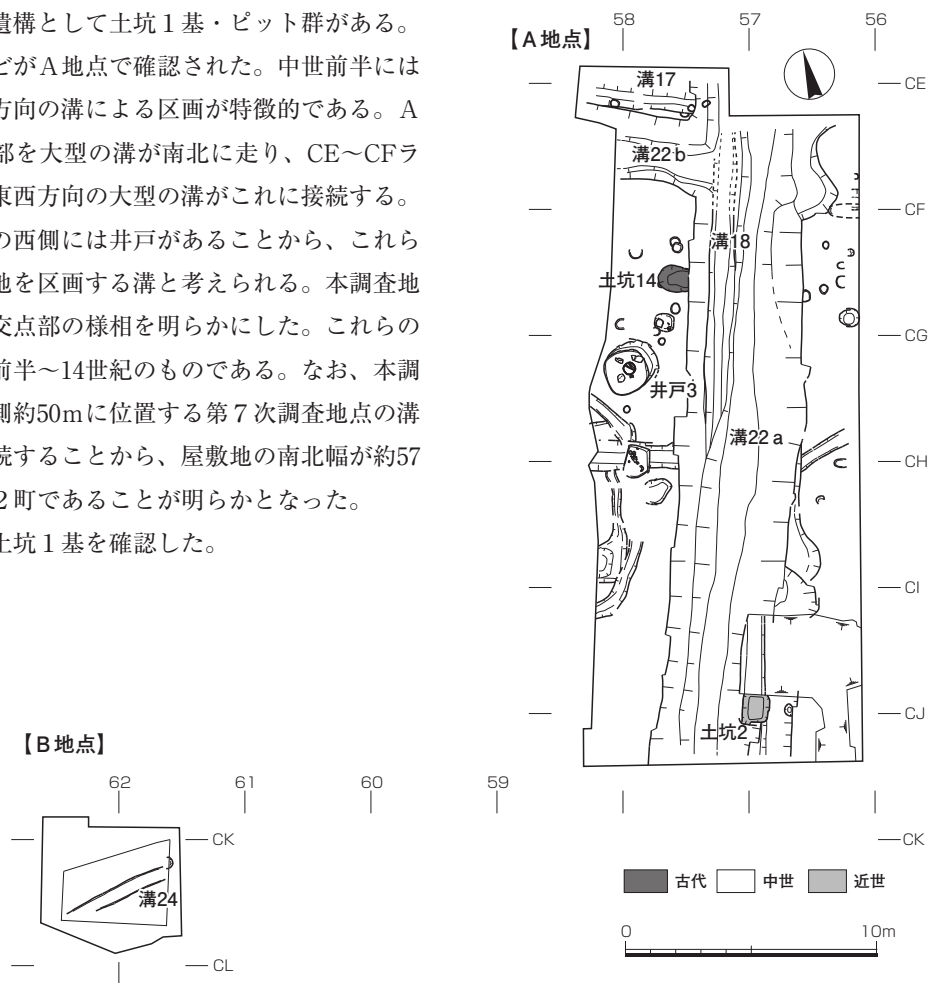


図5 遺構全体図（古代～近世）（縮尺1/300）